自己に頼るべし、 他人に頼るべからず

樋野興夫著
いい覚悟で生きるより

自ら人生の基軸を求め、行動を起こせば手にすることができる
「品性の完成」を人生の目的としてください。

軽井沢追分で、「いのちのバトン~紡がれる夢と希望」をテーマに開講された「軽井沢がん哲学学校」にワイフとともに招かれたときのことです。私は、「いのちのバトン~奥ゆかしい立ち居振る舞い」のタイトルで講演する機会が与えられました。
それに先立ち、星野温泉にある「石の教会・内村鑑三記念堂」を訪問し、地下の資料館で、1926 年に書かれた内村鑑三直筆の「成功の秘訣」を拝読しました。思想家、内村鑑三は意外なことに、「成功の秘訣」という実業家のような 10 か条を残しています。もとは星野温泉の三代目・星野嘉助に贈ったものだと言われています。
　商売とは無縁の人にも、学ぶところの多い 10 か条です。

1 自己に頼るべし、他人に頼るべからず。
2 本を固うすべし、さらば事業は自から発展すべし。
3 急ぐべからず、自動車の如きも、成るべく徐行すべし。
4 成功本位の米国主義に倣ふべからず、誠實本位の日本主義に則るべし。
5 艦費は罪悪なりと知るべし。
6 能く天の命に聞いて行うべし。自らおのが運命を作らんと欲すべからず。
7 雇い人は兄弟と思うべし、客人は家族として扱うべし。
8 誠實に由りて得たる信用は最大の財産なりと知るべし。
9 清潔、整頓、堅實を主とすべし。
10 人もし全世界を得るともその霊魂を失わゞ何の益あらんや。人生の目的は金銭を得るに非ず。 品性を完成するにあり。

　内村鑑三が初めて星野を訪れたのは 1921 年、「芸術自由教育講習会」に講師として参加するためでした。 島崎藤村、北原白秋らと開いた「芸術自由教育講習会」は、何事においても慎みが求められた時代にあって、感じたことを感じたままに表現し、自由に討論できる場であったと言います(石の教会内村鑑三記念堂 内村鑑三解説より)。
　誠実を説き、物質的充足よりも精神的な充足と、品性の完成を人間としての基本に据える内村の言葉は、時代を経ても新鮮に胸に響きます。まさに、内村が掲げる「妥協のない純粋な自由」を思わずにはいられません。
　とくに 10 は、私が言葉の処方箋で多用する「人生の目的は品性の完成にあり」の出典です。 軽井沢がん哲学学校に参加していた約 40 名の人たちの心にも、きっと響いたものと思います。
「がん哲学学校」とは、がん患者さんやその家族、遺族のみならず、地域の人々がともに人生を探求し、人間としての学びを深めようとする場で、がん哲学外来メディカルカフェの発展形です。お茶を飲みながらゆっくりと対話できる場所という点ではカフェと同じですが、あらゆる世代のあらゆる立場の「地域の人々」の参加が特徴になります。私は、「学校長」と紹介され、スタッフの意気込み、情熱、ユーモア溢れる愛情を肌で感じ、感激したものです。
　ところで、中国の孟子は、「天爵を修めて人爵これに従う」という言葉を残しています。 天爵とは、高潔な道徳の実行によって得られる最高の品性のことです。生まれついての徳と言うこともあります。
　人爵とは、人間や社会から与えられる名誉、利益、財産、地位などのことです。多くの人は、天爵を修めずに、ただ

ちに人爵を得ようとして突き進むため、失敗したり、たまたま一時的に成功したりしても長続きしないということを言っています。言葉を換えれば、品性をつくれば、人爵は、その結果として自然に得られ満たされた人生が実現するでしょう、という教えです。

がんを宣告された人にとっては、治療と療養には十分な金銭が必要かと思います。 また、そうでない人にとっても老後のためのお金は重要事項です。私もこの考えを否定するつもりはありません。

ただ、金持ちになりたいと望んでも、すべての人が金持ちになれるとは限りません。でも、「品性の完成」は誰もが目指し、実現することが可能です。それは人がこしらえたものではなく、自らの内面から湧くものだからです。

「自己に頼るべし、他人に頼るべからず」

これもまた、広がりを持って「品性の完成」の自覚へと導く言葉に聞こえてきます。

成功、財産、地位……。人がこしらえた価値観にすぎないものを、生きる目的とするのではなく、自身にとっての品性とは何かを静思し、発動することを期待するばかりです。